

インタビュー 戦前の立教生活

住田 篤さん（昭和一六年卒業）に聞く

聞き手 山中一弘
編集 豊田雅幸
山中一弘

のどかな学生生活

聞き手 立教学院史資料センターでは現在、立教の歴史の中でも特に戦争にまつわることを調べています。研究プロジェクトと称して、立教の先生の他に外部の先生なども招いて定期的に会合を開きながら、何年かの計画である程度の成果をまとめようという仕事をしているのですが、その一環で、卒業生の方たちいろいろなお話を伺うことも行なっています。それで、早速ですが住田先生は、昭和十六年の卒業ですよ？ 十六年の十二月ですか？

住田氏 僕は三月。

聞き手 三月ですか。そうすると、日米開戦は卒業された後ということですよ？

住田氏 そう。俺たちはね、三月までちゃんとまともに学校におって、三月で卒業しているわけよ。一級下はね、その年の十二月に卒業して。

聞き手 繰り上げになっているわけですね？

住田氏 うん。

聞き手 そんなことで、戦前から戦中、その前後のいろいろな世代の先輩方に、特にそのころの立教の様子を伺って、戦争の前と戦中、戦争中も前半と後半で立教がどういうふうに変わってきたかなど、覚えていらっしゃる範囲で伺って、それからご自身の経験だとかそういうこともお聞きしたいと思います。

住田氏 俺たちが卒業するまではね、平和なものだったですよ。戦争と言えば、今でも覚えてるんだけど、国防研究会という学生の組織が今の一号館、経済学部の研

研究室になつてゐるでしょう。

聞き手 経済学部は三号館。

住田氏 三号館だっけ？

聞き手 経済が三で、社会学部が二号館。一号館っていうと本館のことなんですよ。

住田氏 ああ、そうか。その左側のほう、学食に向かつて左側のほう。

聞き手 学食に向かつて左手という社会学部のほうで、二号館ですね。

住田氏 あれがまだあんなに区切つてなくてね、まだ教室に使つてた。それでね、国防研究会が中に国旗か何かつけてましたよ。

聞き手 それは学生の課外活動ですか？

住田氏 そうそう。そのときの配属将校というのは、何か話がわかる人だったんだよ。佐藤という大佐でね。例えばね、富士の裾野へ演習に行ったわけよ。そして、両方に分かれてワーってやるわね。それ終わったら大佐がね、兵隊さんが腰にぶら下げる凶嚢つてやつの中にタバコをいっぱい入れて、「おい、タバコあるぞ、吸つてもいいぞ」なんて、わざわざ買ってきたりなんかして。そういう状態だったんですよ。

この人が面白い人だったと思うのはね、その当時、秋に体育祭というのがあって、仮装行列みたいなのしてみ

んなでワーワー遊んでゐるわけよ。「戦争なんて知らないよ」ってな顔で。そうしたら、その大佐はね、軍服なんか着ないで、普通の、背広ではない、衿をこう折つたやつがあるでしょう。

聞き手 国民服みたいなやつですかね。

住田氏 そういうの古いのを着て、よく体育館の上のベランダからボケーンとして見ていたんです。そうしたらその配属将校がちょっと（学生の）中に入ってきてね、凶嚢をこうする。何するんだろうとこっちから見ていたら、8ミリの撮影機を出して、みんなが走つたりなんかしているのを撮っているの。

それから、今の応援団の吹奏楽団ね。あれも、その大佐の発案だった。

というのはね、音楽部の部室が当時「山小屋」（木造の部室棟）の、本館を背中にして見て右側の一階にあつたんです。あのころはでたらめだからね、音楽部の部室に昔寄宿舎で使っていたベッドを持ち込みやがって、わら袋置いて横になって、デレーンとこうしているわけよ。そこへ配属将校がバットドアを開けて入り込んできた。そうしたら音楽部の連中、優しい人なんだけどやっぱり大佐だと思つと、（緊張して）こんなになるじゃない。その大佐が、「ここではブラスバンド、吹奏楽をやらないか」と。すると「吹奏楽はやりません」というような

ことをキャプテンが言ったのよ。そうしたら、「そうかと。」

そのうちに、その大佐が音楽部の連中でラッパ吹きの中だけ集めて、ブラスバンドの楽器を買って持たせた。それで、教練の最後の分列行進に、できたての音楽部の連中がテッテケテッテケって曲をやったの。それで歩かされちゃって。それがね、立教のブラスバンドの始まりよ。

聞き手 それは何年ですか？ 先生は、立教には何年に入ったんですか？

住田氏 入ったのは昭和十年。

聞き手 予科ですか？

住田氏 うん。予科一に入って、昭和十六年に卒業しているわけ。

聞き手 そのブラスバンドができたというのは、いつごろのことですか？

住田氏 昭和十五年じゃないかな。

聞き手 学部の上級生。

住田氏 うん。卒業する前に。

聞き手 吹奏楽部は今、応援団に属していますけどね。もともとは音楽部の。

住田氏 音楽部でやってた。

聞き手 配属将校がかり出して。

住田氏 音楽部の連中はさ、軍歌なんかやりたくないじゃない。できることならベートーヴェンか何かでこうやってやりたいわけよ。そのときのキャプテンが、小田急の町田にいる奴で、松井田って奴。そいつが、そのときの、昭和十五年の音楽部のキャプテンだった。だからね、そのときはもう戦争で危なくなっていたというけれども、そうじゃなくて、学内というのはもう、にこにこにこにしてたわけ。

その配属将校が転任してから悪くなってきたの。三年の年に、途中でその大佐が転任になったんだ。ほかの部隊に入って、元の連隊に行ったのかな。

最後の学科の授業のときに、柔道部か何かの奴が、代表だと言ってね、送別の辞を述べたわけ。教練といっても、全部こうやっているばかりじゃなくて、学科もかなりあったから。

聞き手 学科もあったんですか？

住田氏 うん。学科っていうと、戦史をちょっと言ったり、こんなときはこうだとかいう話をね。ともかく、戦争に行つて死ぬとか何とかってことあまり感じなかったですよ。事実、僕は昭和十六年三月に卒業して、五月か六月かに徴兵検査受けているわけです。それで、翌年の一月十日に入隊するのが普通だったんですよ。ところがね、十二月卒業は、卒業して間もなくすぐに現地

に入っちゃった。

聞き手 ああ、先生の一級下の人たちですね。

住田氏 下のほうが先に回って。

聞き手 先に軍隊に入っちゃったんですか。

住田氏 だから、十六年（三月卒）っていうのは、えらいうまい感じなわけよ。

聞き手 なるほど、そうですか。十二月の人は、じゃあ繰り上げて十二月に卒業して、すぐ持っていかれちゃったんですか。

住田氏 うん。だから、十二月卒業を僕はよく悪口言ってます笑ったんだけど、お前たちは、月足らずだと。俺たちは三月までまともにいたんだから、十月十日腹の中にいたんだと。お前たちは駄目だって言ってね（笑）、悪口言っちゃ憎まれていたけど。

だから、戦争になるまでっていうのはね、あまり激しい動きはなかった。

ただ、僕自身の経験だね。あの当時皇居前の工事で松林をきれいにしたので、そのときに学生たちが行って勤労奉仕してたわけ。予科の連中は、モッコで土運びに、黙って自発的に行ったらしいの。じゃあ、学部の方はどうするかということになって。そのとき、僕、ちよどクラス委員だったわけよ。僕は哲学の三年生で、三人しか学生がいないんだから（笑）、じゃんけんしてね、

一年目、二年目、三年目、一人一年ずつ（クラス委員を）やろうと。それで、学生主事の辻荘一先生が学部のクラス委員を全部集めて、「予科のほうもやっているし、学部の君たちは皇居前の勤労奉仕をどう思うか」と。僕はね、辻さんに甘えていたから、「いや、哲学科じゃ大反対だ」と。「今こそわれわれが勉強しなきゃいけない時なんだ」と。勉強はしないけど、口先じゃ勉強勉強ってね（笑）。そうしたらね、それを聞いた国防委員会のNって奴がね、辻さんのところへがなりこんでね、「哲学科の住田って奴はいけない非国民である。あんなのは学校から放り出してしまえばいい、放校処分にして」と言い出したんです（笑）。そのときは知らなかったんだけど、よそから聞いたのね。「辻先生、困ってるよ」って、ほかの人が言っているんだよ。それで辻さんのところ行ってね、「先生、僕、余計なことやって先生にご迷惑かけてすみませんでした」って。「だけど、僕は気持ちには本当のことしか言いたくないんだ」って言った。そうしたら、「だけどな、もう少し時と場合を考えて、場所を考えてものを言えよな、きみ」って。そういう感じだった。そういう風に、国防研究会が上級生をとっ捕まえて「このやろう、放校処分にしちまえ」なんていうことを言えるような気運が、立教にあったんですよ。予科の連中はちゃんとおとなしく泥担ぎに行ったらしい。

聞き手 先生は結局行かなかったんですか？

住田氏 うん。だから、卒業するまでは実に平和な状態
でね。

聞き手 そうすると、学内では戦時色みたいなものは特
に、配属将校と軍事教練ぐらいしかなかったんでしょ
うかね。

住田氏 六月に、何とかっていう大佐さんが来て、その
次に飯島っていう人が来たのよ。あの有名な。

聞き手 先生は、飯島大佐は直接はご存じないんですね？

住田氏 うん。

聞き手 もう先生が出られたあとですね。

住田氏 うん。だから、クラスでちょっとそういう（戦
時下のな）雰囲気があるとすれば、宗教学科におった奴
がね、ドイツのヒットラー・ユーゲントと日本の青年団
との交歓会をやったんですよ。そうしたら、Ｙっていう
のが、これは戦死しますけどもね、自分で日本青年団か
何か、そういうものを派遣するところへ志願したんじゃ
ないですか。そうしたら、ちゃんと合格してね、ドイツ
へ行っちゃったんです。何か月間か後にはヒットラー・
ユーゲントのこんな短剣も下げて帰ってきて、得意になっ
てポイイスカウトをやっていた。ポイイスカウトで訓練
をするのに、ここへ短剣をぶら下げて「前へ進め」だの
したりなんかしてたよ。僕ら、そういうのは文化的じゃ

ないなと思うわけだよ（笑）。

聞き手 どうなんですかね。学内がやっぱり全体的にそ
ういう雰囲気で、あまり右寄りっていうか、大政翼賛的
な雰囲気ではない学校だった。それは立教だからなん
ですか？ ほかの大学なんかと比べて。

住田氏 ほかの大学はもう少し右に寄っていたんじゃない
かな。

聞き手 授業だとか、そういうものの中では？

住田氏 授業ではね、あまりそういう、世界状況なんて
しゃべる人はいなかった。ただ一人だけ、日本宗教史で
飯田堯一さんね。日本宗教史講義を聞くのが宗教学科と
哲学だけだから、講義は神学院の教室を使っていた。飯
田堯一さんは学校の中じゃ右なんだな。だけど、その人
も特にこんなになって言うようなことはしない。ただ何
か言い出すと、神学院の教室で興奮しちゃって、世界情
勢はこうだとか何とかって言い出す。そうすると学生が
一人飛んできて、あそこは寮がついていたから、お茶を
持って来て、「先生、お茶、お茶」って（笑）。だからね、
全体の雰囲気がそういう雰囲気なんです。

聞き手 比較的のんびりしていたということですかね。

住田氏 だから、ちょっと下の学年からは海軍の予備学
生ですぐ中尉にされたけど、僕らのときは、ただまとも
に教練をやっておって、幹部候補生の試験受けて通れば

士官学校に行って少尉になる、と。でも僕なんかそれも受けてないの。兵隊検査二度受けたんだけどね、いっぺんは胸がちよっと、肺浸潤があると。検査官が「君の体格はね、実に立派である」と。今よりもちよっと太っていたんだね。「立派だけれども軍医の診断によると、肺浸潤の疑いがある。だから、今年は甲種不合格だ。来年もういっぺん受ける」と。僕は厚生省に勤めていたんだけど、「役所の机なんかにしがみついておったんじゃ治らないから、厚生省なんか休んで、充分治して来年は甲種合格になれ」というわけよ。徴兵官がね。僕はそのときはまだ、兵隊に行っても戦死なんというのとは遠いことだと思っていたしね。だからまあ、一年兵隊検査受けられないんだから、僕にしてみれば一年間確実に生き延びたって感じ。だからね、十五年までは本当にぬくぬくとしていましたよ。

聞き手 宗教的にはどうでした？ 学内はまだ、キリスト教関係の活動っていうのはできていたんですか？

住田氏 いや、やっていましたね、その当時は。僕が卒業するときに、アルバムに写っているのはラッシュモいるし、ブランスタットがいるし、それからもう一人。そういうアメリカの先生たちがね、三月二十五日、卒業式が終わって庭で写真を撮ったんですよ。そのときには、外人たちは日本の格好してきた。だから、戦争が来るっ

ていうのは……まあ、小学校の同級生なんかもう戦死したとか何とかがって聞いたけどね。僕たちはまだ大丈夫だと。

聞き手 先生、ライフスナイダーがいたころってというのは予科ですか？

住田氏 そうそう。それで、ライフスナイダーがアメリカに帰るときに、みんなが立教通りにずっと並んでね、送った。そうしたらライフスナイダーは、ちょっと変な日本語だったけど、「ありがとう。さよなら」というわけだよ。それがね、えらく印象に残っているっていうのは、昭和十五年卒業の小平君。小平君はYMCAにいた。校友会でも副会長か何かになってニコニコしているでしょう。

聞き手 先生もその送るときはいらしたんですか？

住田氏 俺、学校行ってなかったから。サボってた(笑)。

聞き手 じゃあそのお話は小平さんという方がよくされるお話なんですか？ ラーフスナイダーさんをそうやってお見送りしたっていうお話は。

住田氏 ええ。小平君って正直な、あれ牧師の倅でね。

キリスト教 — 理想と現実

聞き手 先生、話がまた飛んじやって申し訳ないんですけど、ご出身は富山のほうでしたっけ？

住田氏 うん。

聞き手 中学まで富山にいらしたんですか？

住田氏 そうそう。中学は兵隊ごっこ大好きな学校だった。砺波中学って、今、砺波高校となっている。これはね、秀才は海軍兵学校とか陸軍士官学校に行く。
聞き手 なるほど。優秀な奴はそこへ行くんだという学校だったんですね。

住田氏 俺はさ、医者の子だからそんなもの関係ないじゃない。でも、みんなが陸士なんか行きたがったらしいよ。
聞き手 そうですか。随分行かれましたか、同級生は。

住田氏 そんなたくさん行かない。落っこちちゃうんだ、みんな。こっち(頭)のほうがあまりよくないんだよ(笑)。

聞き手 先生が富山の砺波中学から、立教の予科に入学したのはどうですか？

住田氏 いや、俺の家は医者でね。中学を卒業して高等学校を受けるの。受けたらこれ、ぴしゃっと落っこちる。それでね、どこか行く所ねえかいなど。そうしたら立教のね……。それまでに加賀豊彦にちょっとかぶれてたの。おやじの本箱に加賀豊彦であるとか、それから大杉栄とか、その当時の左がかった人の伝記みたいなのがあったわけね。それを引っ張り出してきて読んでみたら、加賀豊彦って偉い人だと。やっぱりキリスト教もいいなあと

思ってた。それで、東京へ来て一年間浪人生活しているうちに、だんだんだんだんそういうものが強まってしまっ
て、そのときはね、教会なんか行かないですよ、全然。だけど、立教の入学案内、あれを見るとなかなかいいこと、ロマンチックなことを書いてあるわけよ。それで立
教行くべえということだね(笑)。

聞き手 キリスト教の大学っていうのを選び始めたわけですね？

住田氏 うん。ところが、立教へ入ってみたら、僕はB
SA(聖徒アンデレ同胞会。大学の代表的なキリスト教
団体)っていうのが嫌いだね。何か、キャンディボーイ
みたいなのがね、外人の家へ行くとか、やっている。そ
れで、何かおしゃれで、くにゃらくにゃらして歩いて
(笑)。だからね、僕はYMCAに入ったの。YMに入っ
て何か月間かいたけど、どうもこんなことやってみた
て世の中良くなるわけでもねえと。ほら、その当時、東
北の飢饉の年よ。東北飢饉の年で、東北地方の学生たち
が新宿駅やあのへん来ちゃ、盛んにメガホンを持って募
金や何かをしていた。俺、それを見たときに、そのほう
が正しいと。YMCAに入ったんだけど、こうやって
いるのはね、どうも嘘ついているような気がしてしよ
うがないんだよね。

聞き手 お祈りばかりしていてもしょうがないと。

住田氏 もっと激しい生き方があるんじゃないかねえかっていう感じでね。

聞き手 そのへんも加賀豊彦の影響が随分あるんじゃないかな。スラム街か何かで活動した人ですよ。

住田氏 そうそう。それでカリカリカリして。学校は面白くねえしさ。

聞き手 そうなんですか。

住田氏 だってあの当時はね、BSAの連中が随分多かったですよ。教師でもこういうバッチつけてるのがいっぱいいた。ちっちゃいバッチあるでしょう。

聞き手 アンデレ十字（BSAのマーク）の。

住田氏 うん。あれをつけてた。そういうのを見ていると、「嘘ついているみたいだ」って思ってたね。まともにも勉強すれば、そうではないことはわかるんだけど、まともにも勉強しないで、変なものだけ見て、それでカリカリしているんだからさ、しょうがねえな。

聞き手 やっぱりあれでしょうね。青年期独特の、うわべを飾っているのが何か嫌みたい、潔癖な正義感があったんでしょね。

住田氏 やっぱりそれはあるはね。

聞き手 先生、YMCAではあまりしっくりこなくって。

住田氏 こなかつた。だって、どこの教会へ行っても賛美歌を歌ってあれしようとか、そんなこと……。華やかな

のよ。そうでないのをやりたい。で左を向いちゃうじゃない。だけど左もわからないのよね。その当時よく見た本っていうのは、加賀豊彦と大杉栄と、あと雑誌なんか随分見たけど……。だから、予科の一年二年っていうのは、学校でちよつとそっぽ向いていたんです。三年になったらね、少しづつこつちもおとなしくなるし、それから、クラスの中にいる不良少年グループみたいな連中もみんな落っこちていくし。昔はほら、そのへんのお兄ちゃんたちが簡単に入れたから。初め六十何人かいたクラスが予科三年修了するときには、三十二人か。

聞き手 半分ぐらいになっちゃうんですか？

住田氏 うん。

聞き手 そうですか。先生のおときは予科何クラスですか？

住田氏 予科五クラス。

聞き手 文科。

住田氏 文科がAとB、これはドイツ語とフランス語。

それから商科が三クラス。

聞き手 C、D、Eだったんですか？

住田氏 うん。

聞き手 それで、一クラスだいたい六十人ぐらいおったのが、最後……。

住田氏 僕のクラスは特にひどかったんじゃないかな。

聞き手 そうなんですか（笑）。

住田氏 悪いのがいてね。「俺は三宅島から帰ってきたんだ」っていう強いのがいたんだもん。すぐいなくなっただけだね。

聞き手 それはすごいですね(笑)。島帰りですか。

住田氏 本当か嘘か知らないけど、俺は三宅島から帰ってきたんだって言って。そんなのでも入れたのよ。その当時から、文科へ行くなんていうのは、生活は保障されておらんよ。

聞き手 そうでしょうね。じゃあ先生、何で文科にいらしたんですか？

住田氏 加賀豊彦のね、『死線を越えて』が一番影響与えたね。

聞き手 じゃあ要するに、まじめに社会改革を考えようみたいなお気持ちで。

住田氏 そういう、ちょっとね、要するに田舎の坊ちゃんよ。よく田舎で、地主の息子で変なのがいたでしょう。

聞き手 太宰治みたいな。

住田氏 そういうのと同じ形なんだね。

聞き手 先生、でもお医者さんの息子さんですから、家業を継げとか？

住田氏 言われた。言われたけど、(医学部が)入れてくれねえもん(笑)。だって医学部って難しいのよ。医専でもさ。医専っていうのは、帝京医専と日大医専と昭

和医専と、それぐらいじゃないでしょう。あとは私立の医大で慈恵会と日本医大と。医者っていうのはわりかた安定しているから、みんななりたがるよ。俺もできればね、スツと入れてくれて、黙ってやっているんだっからねえ……。俺の家は外科医だから、おやじの本を見りゃ、筋肉とかいろいろなところにメスが入っている絵とか、ゲーッて絵ばかりだけでも。それでも、生活は安定している。だから、入れてくれたら、なったんじゃないですか。でも、ちょっと向こう(医大)でこんな奴は駄目っていうわけで。だいたい、数学大ッ嫌いなんだ。

聞き手 数学が、立教の入試にはなかったっていうのは本当なんですか？

住田氏 立教にはない。英語と国語だけ。

聞き手 それも幸いしたっていうところですか。

住田氏 やさしい問題よ。だから、今入ってくる人を見ると、この人たちは勉強しているなあって(笑)。本当にできの悪いの、いたよ。

聞き手 そういうのがごったに入っているんで、先生も予科の一、二年ははじめなかったり、授業が面白くなかったりとかいうようなことがあったんでしょね。

住田氏 とてもいやだった。グループを組んで宝塚を見に行こうっていうようなもんだよ。そんなのがいるんだもん。そのグループは、たいがいここ(胸)にパッチつ

けるんだよ。

聞き手 BSAのアンデレ・クロスをつけている。

住田氏 だから、岩井だとか死んだ山田にしても、みんなアンデレ(BSA)に入っていないですよ。

聞き手 そうなんですか。

住田氏 骨っぽいのはアンデレに入っていない。

聞き手 山田って聖公会の主教になった山田襄先生。

住田氏 うん。

聞き手 岩井祐彦さんも司祭ですけど、BSAには入っていないかったですか。

住田氏 うん。僕もね、後年立教に勤めたときに、工藤(俊雄)君がチャペルの前あたりで、「今、アンデレ同胞会の理事会をやって、あなたを会員として認めることを全員一致で可決しました」と、こうきた。それで、彼に言ったの。俺はアンデレ同胞会がなかったらもっと早くクリスチャンになっただろうって。工藤君はブンとして、それっきり文句は言わなかった。

聞き手 先生の目から見るとやっぱり、自分のまわりのBSAの人っていうのは軟弱だっていう感じで。派手で軟弱で遊び人風に見えたってことですかね。

住田氏 そうそう。でも先生たちから見ると、穏やかで、話しても、いいなと思うのもいたんだろうね。だから戦後の(大学の)職員採用には、アンデレ同胞会がずらっ

と並んでいるよ。

聞き手 そうですね。

住田氏 それはね、アンデレ同胞会の小川トクさん(小川徳治元教授)が採った。あの人はいつもちゃんとパッチつけてね。

聞き手 そうですね。僕は、学生時代から八〇年代ぐらいまでのBSAしか知らないんですが、わりとボランティア活動とか、それこそ肉体労働したりとか、あるいはハesen病療養所を訪ねて行ったりとか、そういうことをやっているような、ある意味では社会派的な活動をするところだという印象はあったんですけども、先生が学生のころのBSAっていうのはそんなことはなかった。

住田氏 そういうんじゃないかな。

聞き手 何していたんですか。

住田氏 何してたのかな。清里のあれ(清泉寮)を造った時にね、今のあれはいっぺん焼けた後で造ったんだけど、その前のを造る時は、あそこ、鉄道の線路の踏切のある、あそこからずっと道を作って、清泉寮は俺たちが造ったんだって言っている連中がいましたよ。これは確かにね、石ころの道をやるんだから大変だ。

聞き手 あれはやっぱり、ポール・ラッシュュさんが連れて行った、BSAの方々の仕事なんでしょうね。

住田氏 だけど、中にはこれがクリスチャンかなと思う

のもいるもの。

聞き手 ええ(笑)。そうすると先生は、在学中は洗礼は受けない。

住田氏 受けなかったです。

聞き手 チャペルにはよくいらっしやったんですか？

住田氏 今日はいい人の、何とかさんの説教だったというときには聞きに行ったりしましたね。

聞き手 それは例えばどんな方ですか？

住田氏 いや、もともとは高松(孝治)先生がみんなやっていたから。高松先生は僕もいいと思ったんだけどもね。修身みたいなものも教わってね。あの学科なんていったかな。

聞き手 予科のときですか？

住田氏 うん。高松さんがやったり飯田堯一がやったり、菅岡吉先生がやったりしてただけどね。

聞き手 その修身みたいな時間というのは、キリスト教の話を聴く、今でいう聖書科みたいなものですね。

住田氏 うん。何かそういうもの。

聞き手 始業礼拝みたいな形で、必ず何曜日は礼拝に出ろ、みたいなのはなかったんですか？

住田氏 それはない。

聞き手 自由な、勝手に出ていいような雰囲気だったんですか？

住田氏 そうそう。朝なんか僕、寝坊なもんだから、いつも遅刻しているほうだから、そんな朝の礼拝なんかとんでもない。昼間、午祷礼拝のときにね、「おい、今日だれだれさんだぞ」と。岩井だとか山田なんてのは、「今日はだれだれ先生だ」って。そうかって、一番後ろでこうやって……。そういう時期はあまり戦争の危機っていうのは感じなかったんだな。思い出すと、なのかもしれないけどね。

聞き手 でも、皆さんそうおっしゃいますよ。きょう午前中お話伺った方も、十九年卒ですけど、そんなに切羽詰ったような感じは、学内ではしなかったっておっしゃっていました。

住田氏 うん。

聞き手 特に、じゃあ勉強なんかで支障をきたすような……。先生の在学中に、当時は支那事変っていったやつが、もう中国大陸では始まっているわけですよ。

住田氏 それでね、僕が山へ入っていたでしょう。予科三のときに山へ行っていたらね、あとから遅れて合宿に

来たのがあるんですよ、穂高へ。「変わったことあるか」なんて、山に十日ぐらい前に入っているから聞いたら、「新宿駅で兵隊を送るのが大変だよ」って。だから、兵隊はもう向こうへ行かしていたんだな。だけど、僕はそれ知らないの。

住田氏 うん。

聞き手 特に、じゃあ勉強なんかで支障をきたすような……。先生の在学中に、当時は支那事変っていったやつが、もう中国大陸では始まっているわけですよ。

住田氏 それでね、僕が山へ入っていたでしょう。予科三のときに山へ行っていたらね、あとから遅れて合宿に

来たのがあるんですよ、穂高へ。「変わったことあるか」なんて、山に十日ぐらい前に入っているから聞いたら、「新宿駅で兵隊を送るのが大変だよ」って。だから、兵隊はもう向こうへ行かしていたんだな。だけど、僕はそれ知らないの。

住田氏 うん。

聞き手 先生、予科のときはY M C Aと何をやっていましたか？

住田氏 山岳部。

聞き手 山岳部では、だいたいどんなところへいらしていたんですか？

住田氏 僕は剣専門だったから。剣と穂高と。それから、南アルプスでは赤石から塩見まで全部縦走したし。

聞き手 冬も入られていたんですか？

住田氏 冬は入らなかった。スキー合宿は行った。そこへ行ってね、みんなシューツと帰って来ちゃう。でもいっぺんだけ死にかかった。

聞き手 どんな…。

住田氏 一月のね、何日かな、五日か六日ごろ。唐松まで登って、八方尾根登って唐松へ行って、それから不帰を越えて白馬まで。それで白馬から帰ってきた。これひと晩ね、途中で天候崩れちゃって、岩陰でこうやってた。よく死ななかつたと思ってる。

聞き手 音楽は？

住田氏 音楽は関係ない。それから『立教文学』。

聞き手 ああ、『立教文学』も、先生かかわっていたんですか？

住田氏 その当時は雑誌部とってていてね。校友会の会費を、あの当時は年額予算五〇〇円ぐらい。そうすると、

五〇〇円あればちゃんと一〇〇ページぐらいの雑誌を出せるんだよね。一冊十銭で売ったんだから。『立教文学』を学内でね。

聞き手 先生たちがやってた『立教文学』は第一次『立教文学』ですよ、きつとね。

住田氏 一番初めは『塔』の時代から。それから『立教文学』つてずっときて、学部の三年のとき、僕が心理学の実験室にいたら、学生部のおっさんがやってきてね、「住田さん、『立教文学』の雑誌はもう出せませんよ」と。「これはね、学校が言うんじゃないかって、もっと大きなところから言われるんですから、どうにもなりませんよ」って言われた。それでおじゃん。

聞き手 先生が三年というと、昭和十五年かな。

住田氏 そう、十五年。

聞き手 もっと大きいところからって言われたんですね。

住田氏 うん。

聞き手 何か結構あれですか？ 左翼的な論文とかが出ていたりしたんですか？

住田氏 いや、出てない。

聞き手 それでも駄目になっちゃったんですね。

住田氏 うん。そういうもの全部駄目になっちゃった。

聞き手 へえ。「立教大学新聞」は、先生、そのころどうでした？

住田氏 新聞はね、ちよいと見たことあるけれども、大学新聞としてはね、出たのかどうか。あれいっぺん潰されたんじゃないか？ 僕が金沢の中学で教えただ子で、なかなか秀才だったんだけどね。「僕は先生の跡を継ぎますよ」なんて、立教へ入っちゃったのよ。それが新聞部に入って、卒業してから東京新聞にずっといたけど。そいつがやっぱりね、警職法の何かを書いたら、学校で潰されちゃったの。そのとき学生部にいた、徳さんが。

聞き手 先生の在学中、昭和十年から十六年、大学新聞は出ていますがねえ。そんなにポピュラーじゃなかったんですかね、学生の間で新聞っていうのは。

住田氏 うん。新聞はね、別売りされているんですよ、確か。

聞き手 今、うちの部屋にコピーがあるんですが、先生ほら、資料室にいらしたときファイルしましたでしょう、立教大学新聞。図書館にあったやつで。

住田氏 僕はしてない。伊沢に任せましたから。
聞き手 そうですか。午前中お話しした昭和十九年卒の方もね、あまり見た覚えがないっておっしゃるんで、じゃあそんなに広く読まれたっていうものじゃないんですかね。むしろ『立教文学』のほうが売れていたりなんかしたんですか？

住田氏 『立教文学』は、てれーんとしたやつで。
聞き手 でも、十五年に潰されちゃった。

住田氏 うん。

聞き手 それは『立教文学』に限らずほかの何か学内の出版物も駄目になったんですかね。

住田氏 あのね、要するに出版物全部を潰したわけでしょう、政府が。要するに出版文化協会なんっていうものを作って、これは業者の団体なんですよ。業者が集まって紙をストックして、そこで原稿を見て、これは何部発行してもいいっていうような形になった。

昔はともかくね、小さな学校で……。河盛好藏さんが『立教文学』の部長だったわけよ。そうしたら俺が卒業するときに送別会をしてくれて、河盛さんがこれ（訳書）をくれたんです。

聞き手 有名なフランス文学者ですよ。すごいじゃないですか。

住田氏 だからこれは俺の家宝ものだ。

聞き手 河盛先生の訳で。

住田氏 うん。

聞き手 すごいですね。『立教文学』の部長さんだったわけですね？

住田氏 うん。だから、送別会でね。そのときの写真ね、ほらこれ。そのとき浅草の何とかという店。河盛さんが

ここにいるわけですよ。いい学校だったんですよ、先生が。

聞き手 「浅草宇治の里にて」って書いてありますね。

二月八日。後ろに並んでいるのは後輩ですか？

住田氏 そうそう。これが卒業式の日よ。

聞き手 あ、池部良さんだ。

住田氏 あいつは英語会にいたんだけど、英語劇をやるのよね、舞台の飾りをトンカチトンカチやるの。あれが専門みたいだったの。

聞き手 お父さんが絵描きさんですもんね。

住田氏 うん。だから、こういう人は英語会いたけど、英語しゃべることには関係なかった。ラッシュュだのいるでしょう。

聞き手 ああ、ラッシュュも写ってますね。

住田氏 和やかなものですよ。十六年で、まだそんな状況だったんだもの。

聞き手 先生これね、いっぺんアルバム、写真撮らせていただけませんか？ 先生やっぱり几帳面でいらっしやるんですね、こういうところ。ここって本館とチャペルのつなぎの所ですね。今と違って十字架がないですね……。

砲兵として戦地へ

住田氏 僕が兵隊に行ったのは昭和十八年か。確か十八年だったな、赤紙食らったのは。

夫人 十九年。

住田氏 ああ、そうだ。十九年だ。十九年に行って二年に帰ってきたんだな。

夫人 二十一年。

住田氏 二十一年か。ああ、二十一年だ。

聞き手 先生、ちなみに戦争はどちらのほうにいらしていたんですか？

住田氏 中支。

聞き手 中支ですか。

夫人 いっぺんも鉄砲撃たなかった。

聞き手 そうなんですか。

住田氏 砲兵だから。いや、本当に敵を見たことがないの。だから、大砲撃つなんてとんでもない。

夫人 何かね、船に乗って朝鮮へ行って、中支を通して、鉄砲も撃たないで帰ってきた。それでね、終戦になったら、「お前は立教出たから英語できるだろう」って、上海に行って通訳しろってね。

聞き手 それで帰ってくるの遅れちゃったんですか？

住田氏 いや、そうじゃないよ。みんな帰ってくる途中

でね、敵軍とぶつかってトラブルがあると困ると。それで、どっちもこっちも通じないんじゃないかと困ると。そこで、学校出たような奴をみんな通訳要員にして。僕と商大出た奴と三人が砲兵隊から行って、その中でも僕は旅団司令部の副官の通訳だったけど、また砲兵隊から師団司令部へ行ったわけ。

聞き手 立教出だと、兵隊では嫌なことがありましたか？

住田氏 うん。

聞き手 立教だからっていうんで、特別いじめられたりとか嫌な思いしたりとか。

住田氏 いや、それはなかったですね。ああ、そうだ。いっぺんだけ、具合悪いから、手帳に日記を英語で書いてたのよ、簡単なこと。それを班長に見つかってね、ぐわーんと、ひどい目に遭わされた。

随分遠くまで行ったのよ。まず釜山に上陸して、釜山から汽車に乗せられて、朝鮮半島をずっと行って、それから日本海沿いにと揚子江まで行って。揚子江からまた船で奥まで行って。随分大旅行しちゃった。

だけど、「お前は敵性国の大学」って……。内申がいくんだね。学校のほうからはもちろんだけれども、これは学校教練の成績とかそんなことで、この学生は「士官適」だとか、「下士官適」、それから「不合格」と三つに分けてね。それで、中隊の事務室にいる曹長さんにも嫌

われたんだけどね。僕のこと、相当詳しく知っていたね。

聞き手 先生はもうそのころ結婚されていたんですか？

住田氏 うん。

聞き手 そうですか。

住田氏 あれはね、無駄なものだなんて思ってたもんね。

聞き手 何がですか？

住田氏 戦争つてのは。弾一発も撃たないでボケーッとしているんですよ。俺ね、今体重は五一キロしかないけど、六八キロまであったんだもん。

聞き手 そんなにあったんですか、先生。

住田氏 毎日寝て食って寝て食って。

聞き手 (笑)。じゃあ内地にいるよりよかったですね。

十九年から二十一年じゃね。

夫人 そうですよ。

聞き手 先生は随分幸運、幸運って言っちゃ失礼かもしれないけれども。

夫人 そう。本当にね。

聞き手 大学時代も、そういう意味ではいい時期で、ね。

夫人 生徒三人でね。牛島先生とか辻先生に囲まれていてね、守っていただいて。

住田氏 贅沢だよな。

聞き手 そうですね。哲学科三人だったんですか？

住田氏 うん。

聞き手 毎年そんなものなんですか、哲学科って。

住田氏 うん。だって一級上が大須賀さん（大須賀潔、後の立教大学総長）たちだもんね。哲学科は大須賀さんと、亡くなった、だれだっけ。それから、僕より一級下が四人、そのころからね、心理学は文学部の中で珍しく就職できるって。というのは、職業適性配置で、職業分類するとか、やっているわけ。僕は厚生省に入ってそれをやったんだけどね。そういう時期ですもん。だから、英文科だといったって、これは敵性国の言葉っていうわけでしょう。

聞き手 やっぱりそういう意識がありましたか、先生の学生時代でも。でも、立教は英語教育は盛んだったんでしょう。

住田氏 うん。そのとき別にそうは思わないけど、世間様はね。

聞き手 先生、お生まれは確か大正の……。

住田氏 大正五年。

聞き手 そうするとやっぱり、先生のいらした間の立教大学というのは、そういう意味では戦前の立教の、ちゃんと機能した最後の時代っていうことですね。

住田氏 ただ、中には変な奴がカッカカッカしていたけどね。

聞き手 それでも少数派でしたか？ やっぱりちょっと

右がかつた熱狂的なのっていうのは。

住田氏 うん。

聞き手 国防研究会なんていうのはそういうグループだったわけですね。

住田氏 そうですね。

聞き手 その国防研究会の人たちっていうのは、だいたいどういう人たちなんですか？例えば、体育会系の屈強な人とか、そういうわけでもないんですか？

住田氏 僕が知っているのは、僕より一級下の、僕をもう放り出させて言ったN。一級下はね、七人ぐらいいたんじゃないかな。

聞き手 倍以上ですね。先生三人ですもんね。

住田氏 心理学が四人か五人。

聞き手 じゃあ心理学がもてはやされ始めた時期だったわけですね。

住田氏 その一番トップに来ちゃうまい汁だけ吸って、それで兵隊に行って、こうやってね（笑）。

聞き手 哲学科で心理学専攻っていうのは、先生の前にもあったんですか？

住田氏 あった。先輩が、去年亡くなっちゃった。それでもう残る人いなくなっちゃったね。

聞き手 辻先生っていうのも、心理学がご専門じゃなかったでしたっけ？

住田氏 あの人は東大出るときは心理学。

聞き手 ですよね。

住田氏 うん。

聞き手 立教で何を教えていたんですか？

住田氏 心理学と、初期にはドイツ語だったこともあるってね。

聞き手 音楽は教えていなかったんですか？

住田氏 音楽って科目、なかった。

聞き手 予科にもなかったですか。

住田氏 なかった。あの人は学部のほうで美術史をやっていた。

聞き手 美術史？

住田氏 うん。これが誠に面白くない講義だったけど。

聞き手 学部の美術史の講義というのは哲学科であったんですか？

住田氏 選択科目でやるから、史学科の奴もいるし英文の奴もいるという。

聞き手 音楽史じゃなくて美術史を講じていたんですか、辻先生は？

住田氏 うん。音楽史やりたかったらしいんだけど。

聞き手 だって、専門っていえば半ば以上専門ですもんね。

住田氏 あの人は音楽を心理学的に分析してみようと思っ

て心理学に行ったんだ。

聞き手 だって世の中で辻先生が知られているのは、あのバッハについての著作が一番ですよ（山石波新書『J・S・バッハ』）。じゃあ戦前って、音楽という科目はなかったわけですか。

住田氏 だってその当時は、学生たちもね…そうだ。

『未完成交響楽』の映画が上がってきたな。

聞き手 大学にオーケストラはあったでしょう？

住田氏 うん。

聞き手 上原謙が。

住田氏 やっていたもん。

聞き手 わりと大学としては早いですよ。

住田氏 各大学でやっていたんだけど、そのときはね、メンバーがいらないわけよ。例えば、ホルン吹ける奴がい

ないとかね。楽器でも変わった楽器になんてもう全然やれない。いるのはヴァイオリンとチェロぐらいのもので。

だから、みんな各大学でこうやっていっばい。

聞き手 エキストラに行き合っていたんでしょね。

住田氏 そうそう。それが一回行くとね、二円くれたんだ。そのときの音楽の奴はみんな豊かだね、ちくしようって思ってた。こちらは出すほう専門だね。

夫人 辻先生、グリーククラブの何かしていらしたんでしょ？

聞き手 ええ。立教の音楽教育では重要な役割を果たされたんだらうと思うんですけども。美術史まで講じていたとは知らなかった。その当時は、美学・美術史っていう科目があったんですね。

戦後 — 教師から大学職員へ

聞き手 じゃあ先生はあれですね。二十一年に復員されて、金沢で学校の先生をなさっていたんですね。

夫人 帰ってきてね、いろいろなもの、お米とかが配給だから、おじいさんの家にいたもんで、父親は、お米が東京に送れるようになるまでは東京に出てきちゃいけないっていう。それで金沢の……、中学と高校がちょうど変わる時期で。

聞き手 新制学校になる時期ですね。

夫人 そうそう。だから、きょううちに来たお嬢さんなんかは、金沢二中から三高になった、その生徒さん。皆さん七十歳近いんですよ。ちよこちよここと、東京にいる方々が皆さんいらっしゃる。ちよとど高校になるときだったから、一番いろいろな思い出があるときじゃないですか。

聞き手 それで先生、立教にお勤めなさったのは、何か縁があったんですか？

住田氏 僕はね、あの子たちの中学校の新しくできた高

校の教師やっていたわけ。あれ何年だ。兵隊から復員したのは昭和二十一年で、二十二年から教員を始めて……それで、僕は昭和二十五年に品川にある森村学園って、あそこに引っ張り込まれた。

聞き手 立教大学にはどうして入ったんですか？

住田氏 そこ（森村）で教員やっていたら、岩井祐彦君がアメリカから帰ってきて、あいつとは前から仲いいわけ。それで、僕を何とかうまく言いくるめて、俺も折伏されたわけよ。昭和二十五年から森村に十二年間いた。嘘八百の社会科の先生。そうしたらね、岩井君が、その当時立教大学の学生部長になってたの。その下の学生調査課長がね、佐藤庸也さんって軍人さん。これが実に実直な人で、偉い人なのよ。その人が定年で辞めたの。そうしたら、その後任を学内で探したけど、若いのはいっぱいいるけれども、ちよとどいい年ぐらいの奴はおらんっていうわけ。それで、住田、お前立教に来いっていうわけ。教員じゃないから面白くないかもしれないけど、学生部っていうのはそうじゃない、と。カウンセリングとか、いろんなことをやっている。お前来いと。ちよとどカウンセリングも、ロジャースの理論が出てきたときで、僕は哲学科で心理学専攻だったの。だから、ちよとどいいタマだって。それで三十五年だったわけ、岩井に言われて。これまたものわからぬ奴がわかったよう

な顔してやっていたわけよ(笑)。

聞き手 そうでしたか。でも先生も変わらないですよ。先生、退職なさったのは何年でしたっけ？八二年か八三年ぐらいですか？

住田氏 俺は五七年だ、辞めたの。

聞き手 じゃあ一九八二年ですね。

住田氏 そうそう。

聞き手 では、もう長時間になりましたので、立教にお勤めになってからのお話はまたの機会にとさせて戴きましよう。本日はどうもありがとうございました。

(二〇〇一年十二月十二日収録)